

跳跳蛙
日语读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.1 **4** 4 の ぎく の ほか 野菊の墓



NPO法人 日本語多読研究会 主编

伊藤 左千夫 原著

(日) 近藤 真须子 缩写

山中 桃子 插图

レベル別 日本語多読 ライブラリー

にほんご よむよむ文庫

Vol.1 **4** (4)

の ぎく ほか 野菊の墓

音声CD入り

子^こ 供^{ども}のときから一^{いっしょ}緒^{しょ}に育^{そだ}った
民^{たみ}子^こと政^{まさ}夫^おはとて^なも仲^{なか}が^いい。し
か^し、民^{たみ}子^こが年^{とし}上^{うえ}な^ので、周^{まわ}り^の
人^{ひと}た^ちの目^めは冷^{つめ}た^かつた、二^{ふた}人^り
あ^わ淡^{はつ}い^こ初^{けつ}恋^{まつ}の結^{むす}末^{ばい}は？

こ^れま^でに何^{なん}回^{かい}もテレビドラマや
え^いが映^い画^{とう}に^さち^おな^った伊^い藤^{とう}左^さ千^ち夫^おの代^{だい}表^{ひょう}作^{さく}。

にほんご よむよむ文庫



こ^れは、に^にほ^んご^こを^{べん}き^{ょう}し^てい^る人^{ひと}のた^めの「読^よみもの」シ^リー^ズで
す。4レ^べルに^わ分^かれ^てい^て、昔^{むかし}話^{はなし}、創^{そう}作^{さく}、名^{めい}作^{さく}、伝^{でん}記^きなどい^ろい^ろ
る^な話^があ^りま^す。レ^べル^ごとに^{こと}ば^ぶん^{ぼう}や^{せい}げ^んが^よ制^よ限^{ぎん}さ^れて^いて、読^よ
み^やす^く書^かか^れて^いま^す。漢^{かん}字^じには^すべ^てひ^らが^なが^つい^てい^ます^か
ら、辞^じ書^{しょ}を^ひ引^かな^いで^どん^どん^よ読^よん^でみ^まし^よう。

| レベル | クラス | 語彙数 | 文字数 / 1話 |
|-----|------|------|--------------|
| 1 | 初級前半 | 350 | 400 ~ 1500 |
| 2 | 初級後半 | 500 | 1500 ~ 2500 |
| 3 | 初中級 | 800 | 2500 ~ 5000 |
| 4 | 中級 | 1300 | 5000 ~ 10000 |



跳跳蛙
日语读库



にほんご よむよむ文庫

Vol.1 **4** ④ 野菊^の ^{ぎく} ^{はか}の墓

NPO法人 日本語多读研究会 主编
(日) 伊藤 左千夫 原著
近藤 真须子 缩写
山中 桃子 插图

外语教学与研究出版社
北京

京权图字：01 - 2008 - 1934

© Originally Published by ASK Co., Ltd., Tokyo Japan

图书在版编目(CIP)数据

跳跳蛙日语读库. Vol.1. 4. ④/ 日本 NPO 法人日本語多读研究会主编. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2008.5
ISBN 978 - 7 - 5600 - 7523 - 5

I. 跳… II. N… III. 日语—自学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 064618 号

出版人: 于春迟

责任编辑: 刘宜欣

装帧设计: 王 军

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 北京国邦印刷有限责任公司

开 本: 880×1230 1/32

印 张: 1.375

版 次: 2008 年 7 月第 1 版 2008 年 7 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978 - 7 - 5600 - 7523 - 5

定 价: 34.90 元 (全四册)

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 175230001

日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

わかるものをたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。

読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいでしょう。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

野菊のぎくの花はなが咲さく季節きせつになると、ぼくは必ずかなら思い出おもすことがある。

もう十年じゅうねん以上いじょうも前まえだが、昨日きのうのことのようだ。そのときのことを思い出おもすと、今いまでも涙なみだが出る。

東京とうきょうの東ひがしの方ほうにある江戸川えとがわという川かわを渡わたると、そこがぼくの村むら、矢切村やぎりむらだ。ぼくの家族かぞくは、ずっと昔むかしからそこに住すんでいる。「矢切村やぎりむらの斉藤さいとうさん」といえば、知らない人ひとはいないほど大おおき

い家いえだ。

ぼくの家いえには、母ははとぼく、兄あにと兄あにの妻つま、家いえの仕事しごとをするお増ます、そして親戚しんせきの民子たみこが住すんでいる。ぼくの母ははは体からだが弱よわかったので、民子たみこは母ははの世話せわをするためにぼくの家いえに来ていたのだ。

ぼくは十三歳じゅうさんさい、民子たみこは二歳上にさいうえの十五歳じゅうごさいだった。民子たみこはやせていたけれども、丸顔まるがおで色いろが白しろかった。元氣げんきで明るい女おんなの子こで、ぼくととても仲なかが良よかった。民子たみこは掃除そうじをすると言いったり、お



茶やお菓子を持ってきたと言ったりして、よくぼくの部屋に入ってきた。そして、
「政夫さんはいつも本を読んでいるのね。私も本を読みたい。字も習いたい」
と言った。また、時々、ぼくの背中をたたいて逃げていく。ぼくも民子を見ると、「ぼくの部
屋で遊ぼうよ」と言った。二人で遊ぶのは、とても楽しかった。

しかし、母はいつも民子を叱つた。

「民さん、また政夫の部屋へ行つたね。政夫の勉強の邪魔をしてはいけないよ。民さんは年が

上なんだから」

こんなことを言つて叱るが、母は民子をとともかわいいと思つていた。そして、ぼくと民子と姉と弟のようだと思つていた。それを知つていたので、ぼくも民子も、母に注意されても一緒に遊ぶのをやめなかつた。その頃のぼくには、民子への特別な気持ちはなかつたし、民子にもそんな気持ちはなかつた。

母に何度注意されても、民子は朝ご飯だ、昼ご飯だと言つて、ぼくを呼びに来る。そして、部屋に入つてきて、本を読んだりしてしばらく遊んでいる。特に用事がなくても、ぼくの部屋の前を通るときは、必ずぼくの部屋に入つてきた。民子が来ない日は寂しくて、「今日は何をしているかな」と、部屋を出て探したこともあつた。民子もぼくも、一緒にいるだけで楽しかつた。

そんな民子を見て、お増は、

「民さんはいつも政夫さんの部屋にいるんだよ」

と、近所の女たちによく話していた。それで、村中の人が「二人は仲が良すぎるんじゃないか」と話すようになった。

それを聞いた兄の妻が、ある日、母に注意した。驚いた母は、その夜、ぼくと民子を自分の部屋に呼んだ。

「おまえたちはもう小さい子どもじゃない。村の人たちがおまえたちは仲が良すぎると言っているそうだ」

母の顔はいつもと違ってとても厳しかった。

「民さん、おまえは年が上なんだから気をつけなさい。これからは政夫の部屋へ行ってはいけないよ。政夫も、来月から千葉の中学校へ行くんだから……」

民子は恥ずかしさで顔を真っ赤にして下を向いていた。いつも、叱られても言い返しているのに、この日は違った。

「お母さん、それはひどい。だれが何と言っ
てもかまわないよ。ぼくたちは悪いことなん
かしていないんだから。お母さんは、ぼくと
民さんは姉と弟のようなものだ、仲良くしな
さいと、いつも言ってたじゃないか！」

ぼくは怒って部屋を出た。

そのときから、民子はすっかり変わった。
多くの部屋には来ないし、家の中で会っても
何も言わない。そして、急いで行ってしまう。
時々、用事があったて話するときも、すぐく丁寧
な言い方をするのだ。二人の間には、目に見
えない壁ができたようだった。



ある日の夕方、ぼくは母に頼まれて、裏のなす畑でなすを採っていた。

「政夫さん……」

ぼくは急に呼ばれてびっくりした。後ろを向くと民子が立っていた。

「私も、おばさんに頼まれてきたのよ」

民子はとてもうれしそうだった。

母は元気がない民子を見て、かわいそうに思ったのだらう。民子はにこにこしながら、なすを採り始めた。なす畑は高い所にあり、下には川が見え、遠くの山々や富士山も見ることができた。秋の空、夕日の光を浴びて、ぼくたち二人は、まるで絵の中にいるようだった。

「まあ、すばらしい景色……」

民子もぼくも、しばらくなすを採るのをやめて、その景色を見ていた。



ぼくは民子の横顔を見て、その美しさに気がついた。これまでもかわいいと思ったことはあるが、今日は美しいと思った。やわらかく黒く光る髪の毛、その下から少し見える耳、白く美しい顔、細い首のまわり。

——なんて美しいんだろう——

このときのぼくは、十日前のぼくではなかった。二人は、今までのような友だちではなかった。いつ、そういう気持ち起きたのか、ぼくには少しもわからなかった。母に叱られた頃から、ぼくの胸の中に、小さな「恋の卵」が生まれていたのであるか。この日初めて、ぼくは民子を女として見たのだ。

この十日間、民子とはほとんど話していなかっただから、ぼくは何か話さなければいけないよ
うな気がした。

「民さん……」

ぼくは民子の名前を呼んだけれど、後の言葉が出てこなかった。

「政夫さん、何？」

「何でもないよ。何でもないけど、この頃、民さん変だからさ。ぼくのことをすっかり嫌いになつたようだね」

「まあ、私がいつ政夫さんのこと嫌いになりました？」

「でも、この頃、民さんはすっかり変わってしまったて、ぼくのこととは忘れたみたいだから」

「そんなこと言うなんて、政夫さん、ひどいわ。おばさんに叱られてから、私、一生懸命気をつけているのよ」

民子は泣き出しそうな顔で、ぼくの顔をじっと見た。

「ぼくは怒って言ったんじゃないんだ。ただ、民さんが急に変わって、会っても何も言ってくれないし、遊びにも来ないから寂しかったんだ。だから、これからも時々遊びに来いよ。お母さんに叱られたら、ぼくが悪かったと言うよ」

ぼくがこんなことを言うので、民子は困っているようだったが、同時にとでもうれしそうだった。そして、話しているうちに、すっかり元の元氣な民子になった。ぼくもうれしくなった。

二人は、まるでこの世の中にはぼくたちしかないという気持ちになって、残りのなすを一生命採った。

なす採りが終わって気がつくとき、日は西の山の向こうに沈もうとしていた。

「民さん、見て。夕日がきれいだよ」

「まあ、本当」

民子はなすを入れたかごを下に置き、手を合わせて夕日を拝んだ。ぼくはこのときの民子を、ずっと忘れることができない。

二人が話をしながら帰つてくると、お増が家の前に立ってこちらを見ている。

「お増がまた何か言いますよ」

「ぼくも民さんも、お母さんに頼まれてなす採りに行つたのだから、お増が何と言つても大丈夫だよ」

この日から、二人の「恋の卵」は、どんどん大きくなっていくようだった。民子は、またぼくの部屋に来るようになったが、いつもだれかに見られていないか気にするようになった。「遊びに来てよ」と言つたぼくも、民子が長くいると、人に何か言われるのではないかと心配になった。結局、二人はしばらくの間、話さないことにした。

二二 さん

ぼくの村では秋祭りの前に、畑の仕事を全部終わらせなくてはならなかった。

ある日、母は、ほくと民子に山の畑の綿を採ってくるように言った。母の言葉に、ほくも民子も驚いた。ほくも民子も、心の中ではとてもうれしかったが、その気持ちを外には出さなかつた。喜んでいられると言われるのが嫌だったからだ。きつと兄の妻やお増は、母やほくたちがいないところで、「お母さんは何を考へているんだろう。あの二人を一緒に山の畑に行かせるなんて」と言っているだろう。

二人はなかなか出かけようとしなかつた。母は二人を急がせた。

「早く行きなさい。山の畑までは遠いのだから、早く行かないと帰りが遅くなる。夜にならないうちに帰ってくるんだよ」

そして、お増に、二人の弁当を作るように言った。

二人は一緒に出かけるところをだれにも見られなくなかつた。ほくが少し早く出かけ、村を出たところで、後から民子が歩いてくるのを待った。民子が来ると、二人は一緒に歩き始めた。今日は急いで綿を採って、面白いことをして遊ぼう、などと話しながら歩いていった。

道の両側にいろいろな草花が咲いている。その中に野菊の花があつた。



「民さん、ほら、野菊」

ぼくは足を止めたが、民子は聞こえないのか、
どンドン歩いていく。ぼくは野菊を採った。民
子はしばらく一人で歩いてきたが、ぼくがいな
いことに気づいて、急いで戻ってきた。

「政夫さん、何をしていたの？ ……まあ、き

れいな野菊。私、本当に野菊が好きなの。半分、
私にくれない？」

ぼくは野菊を民子に渡した。

「ぼくも前から野菊が大好きさ」

「私、野菊を見ると涙が出てくるの。なぜだ
かわからないけど、不思議なくらい野菊が好き
なの」